

2012年 8月27日・岩手日報 「風土計」欄では

本県関係者を含め若松さんら国内外の詩人 コールサック社から

「脱原発・自然エネルギー 218人詩集」を出版。

紙面では「被ばく」と「被爆」を書き分ける。被ばくのばくは「曝<sup>さら</sup>す」で原発事故は被ばく者。広島、長崎の原爆被害者は被爆者と言う▼放射線を体に浴びることは同じだが、発生源で区別する。奥州市出身で、福島県南相馬市在住の詩人若松丈太郎さんはこれに異を唱える。「広島・長崎と福島を同列に語り、扱うことに、意味があるのではないか」と本紙に寄稿した▼本県関係者を含め若松さんら国内外の詩人はコールサック社から「脱原発・自然エネルギー 218人詩集」を出版した。埼玉県狭山市の結城文さんは「ヒロシマ ナガサキを壊滅させた核エネルギーが／平和利用のエネルギーとして／送電線網によって運ばれ／私たちの家庭でも使われてきた」とつづる▼核兵器は核エネルギーの「悪用」で、原発は確信犯的な「誤用」だと主張する若松さん。原発を「核発電」と言い、原発事故は当事者だけにとどまらず広範囲に影響を及ぼす核による構造的な人災「核災」と表現する▼1957年の8月27日。茨城県東海村の原子力研究所で研究用原子炉 JRR - 1 が青白い光を放ち臨界に達した。「わが国初めての”第3の火”がともった」と関係者らは実験の成功を喜んだ▼それから55年がたった。新たな体験がものの見方を変え、言葉が変わる。臨界の日にそんなことを考えた。

と紹介されています。